

「ね、ねえイヴちゃん
お願いだから正気に戻って？
こんなの、こんなのおかしいよっ」

「正気？」

「じゃありさは正気なの？」

「え……」



「さっきから、色々言ってるけど
一度も逃げようとしてないよね？」

「そ、それは……」

「羨ましそうに見てたよね？」

あたしのおまんこに出入りしてるご主人様のおちんぽ♡
ホントは自分も犯されたいんでしょ？」

「そんな……」



「もう自分に言い訳しなくなっただけいいの
嫌がっても受け入れても同じ結果になるんだから」



「んっ♡ うんうっ♡」

おっぱいに男の指が食い込んでくる。

乱暴で、強引で、嫌なはずなのに——気持ちいい。

「にしてもこのエロシスター服エロいな
下は紐パンだし」

「そんなにお好きなら
あたしも着ましようか？」

「それもいいかもな
まずはコイツを堕」としてからだけど」



「花恋の言ってたとおり
ホントにエロいガキだな。」

こんな状況なのに乳首ビンビンで感じてやがる」

「やめ、いやあ♡

んいっ♡

引っ張らないでえ♡」

硬くなった乳首を摘まみ上げられて

目の前がぐらっと白く染まる。

自分の身体も支えられなくて

男に体重を預けてしまう。

オム♡

アホ♡

は♡...♡



(す、ごいの……当たってる……)

服越しにお尻に触れるその感触から目を逸らせない。

(さっきイヴちゃんにあんなに射精してたのに……)

硬くて、大きい。

イヴを貫いていたときの外見が感触を補完する。

視界の外にあるはずなのに、

その色とカタチがはっきり見える。

「はあ……はあ……っ♡」



「リサったらご主人様のおちんぽ
欲しくてたまらないみたい♡」

「そんなことっ……」

「私、悪魔なんかの……んんっ♡」



「素直になれないリサには
特別に魔法をかけてあげる♡」

「なに……するつもりなの……？」

「それはかけてからのお楽しみ……♡」



「テンプテーション♥」



（なに、かけられたの……？
頭、ふわあ、って……

なにも……

（かんがえ、られない……♡）

「はあ……♡ はあ……♡」

（かんがえ、られるのは……

これ……この、硬いの……♡

ちんぽ、ちんぽ♡）

「今かけたのはあ、

悪魔族専用の、素直になれる魔法♡」



「すなおっ……」

「いい表情になったね、リサ♥

お色直ししてあげる……♥

それにしても下品なおっぱいね♥

あたしよりデカいんじゃない？」

「ふあ……♥ んっ♥ んいっ♥」

「服のサイズもキツキツで収まらないし

ま、これでいっか♥

淫乱^{リサ}らしさが出るでしょ♥」

たぶっ♥



[illegible]

「あー……じゃあ下の具合はどうかかな？」

「んんんんんんんん♡」

「随分浅ましい口だね
よだれがダラダラだ
ちよっと触っただけでイッてしまうだなんて」

「あー……じゃあ下の具合はどうかかな？」

んんんんんんんん♡」

「随分浅ましい口だね
よだれがダラダラだ
ちよっと触っただけでイッてしまうだなんて」

「コレがほしいんだろう?」

「あ……♡」

「ちんぽ……♡」

「そう。」

「今、君が欲しくてたまらないちんぽだよ」



「ほらリサ……」

欲しいなら素直におねだりしなきゃ」

「ちんぽ……ちんぽおっ♡」

おねがい、おねがいですう♡

ちんぽ、ちんぽちょうだいっ♡」

「さすがは花恋の魅^{テンプテーション} 了だ

元々淫乱なだけかもしれないけどね」





「んあっ♡ はあ♡

ちんぽ……ちんぽおっ♡」

「うっわ、ガングマってんじやん
大丈夫？」

「もう、無理い♡

ちんぽっ♡ おちんぽほしいのお♡」

「リサちゃんって処女？」

「は、は、は……♡」

「やっぱりね」

「オナニーしまくってるでしょ」

「なんで……」

「見ればわかる」

「お前は花恋以上の」

「どうしようもないマゾメスだ」



「いつもマンズリこくとき
なにをオカズにしてるんだ？」

「それ、はあ……」

モヤがかかって
うまくまわらない頭でも
それを告白することだけは拒絶していた



「コイツが欲しいんだろ？」

「あ……♡ ああ♡」

「これからお前の処女喪失の相手になる悪魔ちゃんばだ
よく見て、匂いも覚えるんだ」

「はあ……♡ ああ……♡」

濃密な——濃密すぎるオスの匂いが鼻を抜ける
想像の何十倍も臭くて、
想像の何百倍も芳しかった



何度も、何度も、
妄想だけはしてきた状況^{シチュエーション} 況

だけど現実はそのよりもずっと——濃い
イヴちゃんにも、男の人にも見られてるのに
無意識のうちにアソコを掻き混ぜてしまう
手が止まらない
止められるわけがない
二人の視線に晒されて
いつもどおりにくちゅくちゅと音を立てる



「で、いつもはなにをオカズにしてる？」

「ホントの『エロ』はなかな
リサがしてほじらふよ
してもらえなうよ♡」

「言うんだマズメス」

（あああ……♡
全部、全部見抜かれてる♡）



「わ、わたし……」

えっちな、格好して……」

男の人に、えっちな目で、見られて……♡
見られるだけで、興奮してえ♡」

「それで？」

「どうしてそんなに妄想してイマズロするの？」

「誘ってるんだろ、って♡

強引に、押し倒、されてえ♡

レイプっ♡ される、妄想ですう♡」

「こりやまた、想像以上の淫乱だ」

「じゃあ今日は夢が叶うんだ♡
よかったね、リサ♡」



「妄想のちんぽと比べて
俺のちんぽはどうだ？」

「すっぴんすっぴん♥
想像してたのよりずっとお♥
このちんぽで犯されたいのお♥」



「願いを叶えてやる、よっと」

「んいんいん♡♡♡

挿入っで、きたあ♡♡

ぶちぶちいって♡♡

処女膜、裂けてっ♡♡

一気に、奥までえっ♡♡」

「花恋に負けないくらい
スケベな穴だっ」





「んあっ♡ はあんっ♡ おおんっ♡

こんなのっ♡ 無理っ♡

頭の中っ♡ 融けちゃうっ♡」

「悪魔族のちんぽはすごいだっ」

「イイッ♡

目すばるっ♡

子宮に届いてっ♡

おおっ♡ ほおおっ♡」

オキ
ユッ

オキ
ユッ♡

ブルン

ブルッ♡

おっ♡

んがっ♡

オキ
ユッ♡

オキ
ユッ♡

「なありサ

お前の妄想では
いつも最後はどうなるんだ？」

「おおっ♡ ほおおおおっ♡
そりえっ♡ そりえはあっ♡」

「妄想のとおりにしてやるよ
答えろ、リサ」





「腹内っ♡ 腹内にっ♡
んおっ♡ おおっ♡
全部っ♡ 子宮にっ♡」

「そっじゃあその『妄想』叶えようさー」

アキユッ

トキユッ♡

キッ♡

キッ♡

ズッ

ビクッ♡

キッ♡

キッ♡

ビクッ♡

キッ♡



「んおっ♡ おおんっ♡
イクッ♡ イクイクイクイク♡
ほおおおおおおっ♡
しゅわっ♡ しゅわっしゅわっしゅわっ♡」

ズルル
ズルル
ズルル

ハッ
ッ

イルッ♡

ハッ♡

ハッ♡

ハッ♡
ハッ♡
ハッ♡

ハッ♡

ハッ♡
ハッ♡



「はあ……♡

はあ……♡

はあ……♡

らめ……らめえ……♡

これ、いじょう、はあ♡」

「なにがダメなの？」

あんなに気持ちよさそうに

ご主人様のちんぽいただいでおいて♡」

「おね、がい……かれん、ちゃ……

さっきの、魔法、解いてえ♡

こん、にゃの……おかしく、にやるぅ♡」

「リサったらなに言ってるの？」

「なに、って……」

は……♡

は……♡

「ふふっ♡

魅了の効果時間はとくにすぎてるわよ♡」

「うん……」

「嘘じゃないわ

さっき乱れてたのはリサが淫乱なだけ♡

でも気にすることないのよ

メスがちゃんぽに勝てるわけないんだから」



「ちがう……ちがう……」

嘘……嘘……

わたし……私は……

そんな……」

接続が切断されました

「はぁ……はぁ……はぁっ♡」

ログアウトしてしばらく経っても、
心臓がバクバクと暴れていた。
部屋の温度はまだ肌寒いくらいなのに、
身体の火照りが収まらない。

「んっ……♡」

指先が触れただけで、
ショーツからぐちゅっという音が出る。

「こんな……濡れてる……」

無理矢理……犯されたのに……」

思い出しただけで、キュンキュンと子宮が高鳴る。



——ホントにエロいガキだな。
——こんな状況なのに乳首ビンビンで感じてやがる。

あの男の言葉が蘇って、
手が自然と胸をイジる。

「ああ♥
乳首、ビンビンになってるう♥」

あの男にされたことを、記憶の中から再現する。
胸を揉んで、乳首をつねると、

「こんな……風、に……あんっ♥」

雷のような快感が乳首から全身に抜けて、
火照りは収まるどころか熱を増していく。
お漏らししたみたいに濡れたショーツを脱ぎ捨てて、続ける。



——さて……じゃあ下の具合はどうかな？

「あ、ああ……♡」

嘲るようなあの声を思い出しながら、
束ねた指を挿入れる。

「んああ♡」

あの男の指よりも細くて、柔らかい指が、
ぐちゅぐちゅと自分の膣内^{ナカ}を掻き混ぜる。
いつもどおりの——私の日課^{オナニー}。





私は、発育が早い方だった。
背はそんなに高くないのに、胸やお尻ばかり大きくなった。

小学校高学年になる頃には、同級生と比べて、
明らかに女性的な体型になっていたし、
スケベなことしか考えてない同級生からは、
いつも見られて、オナネタにされていた。

中学を過ぎた頃には同級生だけでなく、
周囲の大人までもがいやらしい目を向けてきた。

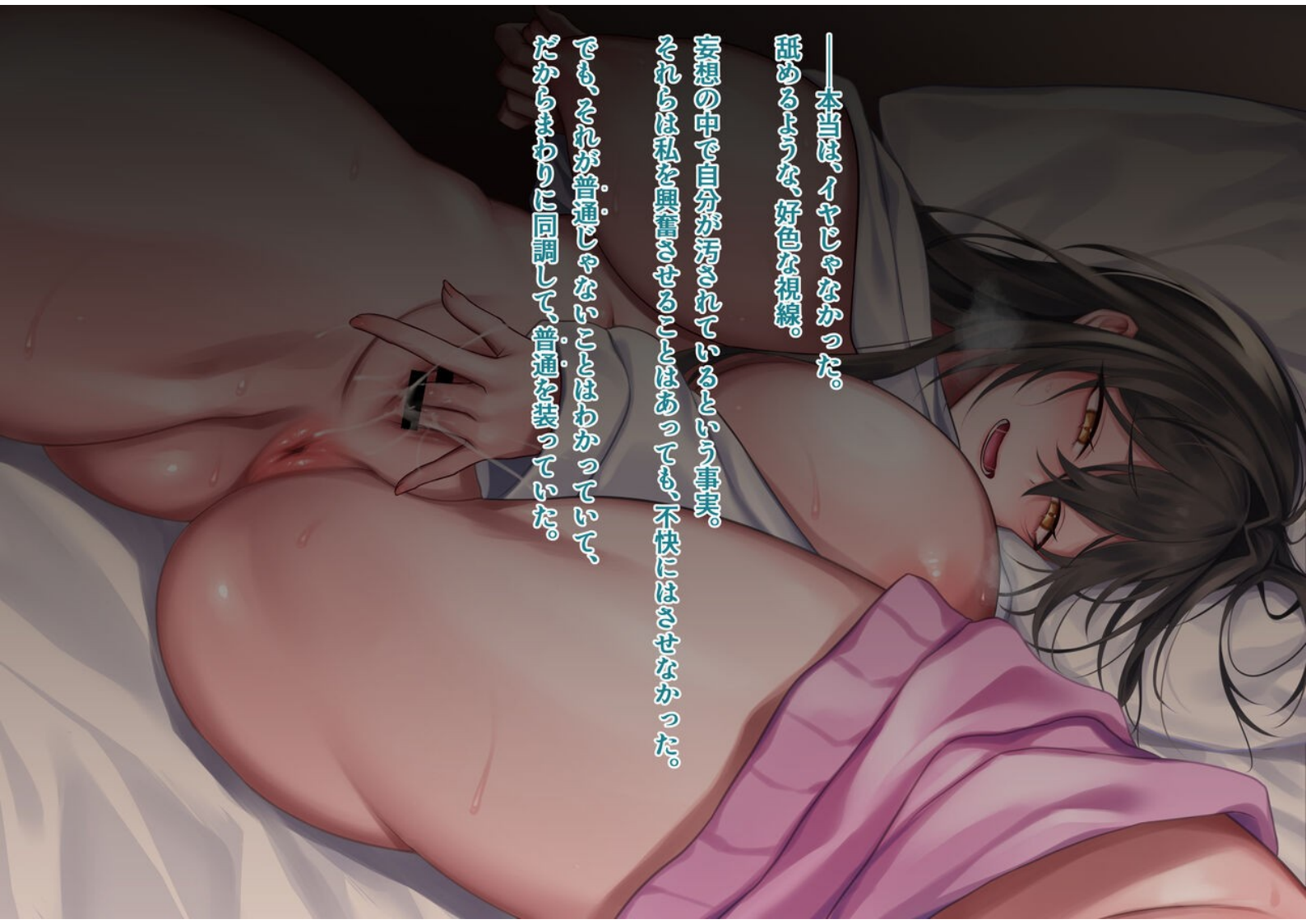


友達はみんな、そんな男たちに嫌悪の感情を向けていた。

——愛里紗可哀想。

——男って本当最低。

私も、そんな友達の言葉に頷いていた。
——だけど——



——本当は、イヤじゃなかった。
舐めるような、好色な視線。

妄想の中で自分が汚されているという事実。
それらは私を興奮させることはあっても、不快にはさせなかった。

でも、それが普通じゃないことはわかっていて、
だからまわりに同調して、普通を装っていた。



そんな私にとって、グリモアファンタジーは救いだった。

現実だったら普通じゃない、露出の多い服装も、
ゲームの中なら自然にできる。
ステータスが優秀だから。
可愛くて気に入っているから。
そんな理由をつけて、胸を見せつけるような装備を選んだ。



男性プレイヤーには優しくするようにした。

ちょっと優しくするだけで、男たちはいやらしい視線を向けてきた。
このあとで自分がオナニーのオカズにされるのだろうと思うと、
興奮して——それを想像して、オカズにしていた。

それが、誰にも言えない私の秘密。
それなのに、あの男は、一目でそれを見抜いた。

「い、くっ——♡」

あの男の顔を、
そしてあの感触を思いだしながら、達する。
でも、足りない。

いつもは一度達すれば弱まる火照りが、
収まるどころか加熱される。

「なんで……」

本当はわかっている答えから目を背けて、問いかけた。
直後、スマホが震えた。



「メッセージ……？」

送信者の名前を見た瞬間、心臓が跳ねた。

「花恋ちゃん、から……」



「ふんふんメロメロでも満足できたらいいわ。」

「なんで……」

わかるの……？

そんな、口にすら出してない疑問さえも
見透かしたみたいに、

『私やアンタみたいなマゾメスが、
自分のことを支配してくれるおちゃんばに
出会って、
それ以外で満足できるわけないもの』

「あ……」



「ねぇ、リサ。
ゲームの中だけじゃなくて、
現実でもおちんぼで支配されたいでしょ？」

「それは……私……」

返信できずにいる私に、
だけど花恋はメッセージを送り続けてくる。

「アンタも、私と同じ、マゾメスなんだから」

「あ……」



「そっか……。
それが……マゾメスの普通、なんだ……♡」

「住所教えて鍵を開けてなさい」

答えたらもう、取り返しはつかない。
そんな確信があった。
だけど——

「ぐっ——♡」

♡ ちゅ……♡♡



「三十分も掛からずに着くわ。
好きなだけおまんこほぐして待ってなうら」



ガチャリ、と。

音を立てて男と花恋が入ってくる。

顔も、名前も知らないけれど、

彼こそがあの悪魔族の男なんだって一目でわかった。

「マス臭すぎえな。

どんだけ発情してんだよ」

「オンド、

ワチャリ、ガチャリ、と、花恋は男と花恋が入ってくる。」



「はぁ……はぁ……あ、あ♥」

「そんなにチンポが欲しいのか？
リサ——いや、愛里紗」

「はい……欲しい、です……♥
おちんぼ、ください……♥」

「マゾメス愛里紗のリアル処女、奪ってください♥」

「良いぜ。」

「お前が待ち侘びてたコイツをくれてやる、よっ！」







「あんっ♡ んああうっ♡」

「どうだ愛里紗？
はじめての生チンポは？」

「あひる♡
しほけななな♡
あめいさる♡」

グッ♡

グッ♡

グッ♡

グッ♡

グッ♡

グッ♡

「もう取り返しがつかないくらい支配されるの、ゲームの中より、ずっとイイでしょ?」

「はひい♡　さい、こう、れひゅ♡
これ、があ♡　ご主人、様あ♡」

「ええそうよ。
リサの淫乱おまんこで、しっかり覚えるの。
オスに媚びる方法をね♥」







「おまんこっ♡
子宮にっ♡
ご主人様のザーメン、くらひやいっ♡」

「いいのか？
ゲームと違って、
本当に妊娠するかもしれないぞ？」





「おおおっ ♥ んおっ ♥
あついのおっ ♥ ザーメンっ ♥
注がれてえっ ♥
イクイクウウウッ ♥」

ハッ

ソッ

ソッ

ハッ

ハッ

ソッ

ハッ

ズルルッ

ハッ

ハッ

広大なフィールドを持つグリモアファンタジーの内部には
人があまり寄りつかないような場所もある。
今、私がいるのもそんな場所のひとつだった。

「はあ、はあっ。」

ああ……嘔みたいだ。

あのリサちゃんやれなんて……」



熱くて荒い吐息が吹きかけられる。
以前の私は嫌がらなきやいけなかった。
下心を隠そうともしない態度。
だけど今は、それが心地良い。
だって私はマゾメスだから。
男の人のズリネタにされて、性奴隷にされて、
それが普通だって気付いてしまったから。



「あんっ♥ 鼻息荒すぎです♥
そんなにガッつかなくても逃げたりしないのに♥」

オマンコに押しつけられたチンポが硬くなる。
ゲームの中とは思えないくらいリアルな欲望の熱が伝わってきて、
私のオマンコからもエッチなジュースが溢れていく。



「ほら……このガチガチオチンポ
リサにブチこんで♡」

「く………エロやねん。。
挿入れるよっ!」



ぐぢゅっ♡

「んいっ♡

チンポキたあゝっ♡」

ブルンッ

ピクッ

ズッ
ズッ
ッ

チンポが挿入^{はい}してくると、頭が真っ白になる。
自分を偽っていた頃には得られなかった、本当の充足。

「はあ、はあっ……
リサちゃんの膣内^{ナカ}、すごっ……
なんていやらしい娘なんだっ……」

私の身体のおちこちを撫でまわして、
揉みしだきながら、彼は腰を振り始める。



「あぁっ！」

リサちゃんっ！

リサちゃんっ！」

ご主人様にレイプされたあの目から、私は変わった。
ううん、本当は変わってはいないのかもしれない。
見て見ぬフリをやめて、本当の自分を受け入れただけ。

だから今日も、私は売春^{ウリ}をする。

前みたいに真面目なゲームの攻略なんてほとんどしてない。
したとしても、それは真面目な女の子プレイヤーというブランドを保つため。



「射^で精^だるっ！
射^だ精^だすよっ！」

「あっ♡ あっ♡
膣^{ナカ}内に射^だ精^だしてえっ♡」



「ほ、ホントにナマでいいんだねっ？」

「イイっ♥ イイからあっ♥
リサの子宮にザーメンどびゅどびゅしてえっ♥」



「あぁっ！」

リサちゃんっ！ リサっ！ リサアッ！」

熱い欲望が私の^{リサ}アバターに注ぎ込まれる。

本当の名前も、現実での容姿も知らない男の欲望。



「ああ……すごかったよ……
リサちゃんも気持ちよくなってくれたかな？」

客の言葉に、当たり障りのない返事を無意識に返しながら、
私は注ぎ込まれた熱い欲望の感触を味わう。
私は今——シアワセだった。



「これが……女の子のおっぱい……」

「んふっ♡ もしかして、女の子とするのはじめて？
童貞さんですか？」

「あ、ああ……」

「ふふっ♡」

「じゃあ私が筆下ろししてあげますね♡
センズリばかりこいてた童貞チンポ♡」



「うわ……やわらかっ」

「んっ♡ 手つき、やらしい♡
リサのおっぱい、ぐにゅぐにゅってえ♡
チンポも、当たってるう♡」



「逆ナンって、ホントにあるんですね……
美人局とか、そういうのじゃないですね？」

「違いますよお♥
私はあ、ただのマ・ゾ・メ・ス♥」



最初は確かに、ちょっと怖かった。
なんだかんだでログアウトすれば、
アカウントを消してしまえば、
なかったことにできるゲームの中とは違う。
密室で、男の人に押し倒されたら逃げられないのだから。

だけど――。



すぐにわかった。

そうして使い潰されるかもしれないスリルが気持ちいい。

むしろ、そうされたいとすら思ってる。

だから、逆ナンは私の日課になっていた。

前なら絶対に着なかった、痴女みたいな、痴女そのものの服で、

男の人の劣情を集めて、声を掛ける。

今のところ、一人だって断ってはこない。



「ほら……はやく挿入したくないですか？
私のオマンコ、名器だってみんな言いますよ？
今だって、外でみんなにエッチな目で見られて、
あなたにおっぱい揉まれて、
トロットロになっちゃってますよお♡」



「んうううっ♡
童貞チンポキたああっ♡」



「ああんっ♡

んいっ♡」

「くっ……エロすぎだろ、この、淫乱っ！」

苛立ちをぶつけるように、抽送がはじまる。

技巧もなにもない、乱暴な抽送。

「だけど——それでいい。」

上手くななくても、欲望が伝わってくる。

下劣な欲望に穢されて犯されること自体が気持ちいい。



「ダメだっ、もう射精るっ！」

「射精してっ♡」

射精してえっ♡

マゾメスの子宮に、

会ったばかりの童貞ザーメンいっぱい注いでえっ♡」

はっ♡

はっ♡

っ♡

っ♡

っ♡

っ♡



「んっんっんっ♡

ぶりっぶりの生ザーメン、子宮にキてるぅ♡」

ああ、もう。

本当に、ダメだ。



こんなでキモチイイこと
やめられるわけがない。



「はあ……はあっ……！
愛里紗ちゃんっ……！」

荒い吐息のまま、私は寝室に押し込まれた。
綺麗に整えられた二人用のベッドに押し倒される。

「ちょっ……
おっ、お兄さん……なにをっ……」

血走った瞳が私の身体を舐めてゆく。
お兄さんはズボンからいきり勃った肉棒を取りだすと、
私の股にそれを割り込ませてきた。

ギ
ニ
ッ



「妹がいなくてわかってて男の部屋に来たんだ。
愛里紗ちゃんだってこういうことを期待してたんでしょ？」

早口でまくし立てながら、服はだけさせられる。
慣れているとは言いがたい、
乱暴と気遣いの混ざった手つき。

「そんなこと……」

ふるふると首を振って否定の意思を示す。



「こんなのっ、奥さんに悪いです……」

ここは夫婦の寝室。

二人用のベッドの半分は、奥さんのためのスペースのはずだ。
そのことを指摘すると、お兄さんの血走った瞳に、
わずかに理性の色が戻った。

「そんなの、

僕だってわからないんだ。

こんな……自分が抑えられなりの、なんて……。

「こんな、いやらしいおっぱいで君が誘惑してきたんだっ！」



「私っ、そんなつもりじゃっ……
誰にも言いませんから、やめてくださるっ……」

言いつつも、本気の抵抗はしない。
もし本気で抵抗しても、相手は男で体格も全然違う。

「頼むよ……」回でいい。
だから、だからっ！」

抵抗するフリをして、腰を揺する。
勃起した肉棒に、塗れた割れ目を擦ると、くちゅりと音が立つ。
蘇りかけた理性がまた消えて――。



「その……」回だけ、ですわね。」

強引に迫られて、仕方なく——
そう、思わせるように頷くと、
お兄さんの肉棒が、私の膣内へと突き込まれる。
とっくにぐちよぐちよの私の割れ目は、
お兄さんの肉棒を簡単に啜え込む。



「んんっ——♡」

堪えきれずに、声が出る。
そんな風に装って。

「く、あ……」

すごい……愛里紗ちゃんの中……
こんなっ……」



私は、漏れそうになる笑いを必死に堪えていた。

(本当に——チヨロくて仕方ない♡)

こうなるように仕組んだのは私だった。

ご主人様にいただいた興奮剤でお兄さんの思考を緩ませておいて、いかにも清楚で、だけど隙の多い女を演じれば——このとおり。

もし私が拒絶していたら、きっとお兄さんは手を出してこなかった。

一度未遂までいったら、自分の行為を反省して、

もう会おうとはしてこなかったと思う。

だけど、お兄さんは我慢できなかった。

だからもう——ゲームオーバー！



ご主人様ほどじゃないけど、太さも長さも立派なそれを受け入れる。
どうすれば男を気持ちよくできるのかは、
仮想世界でも現実でも、数えきれないほど繰り返して覚えたから。

「愛里紗ちゃん……動くよ」

（ああ、結構立派なチンポなのに、下っ手糞
私のことを気遣って腰振ってるんだもん♡）

この間売春でシた、こじらせた軍医くんの方がよっぽど上手い。
自分が気持ちよくなることだけを考えて、
相手のことは勝手に動く穴だと思って——使う。
それが女を一番気持ちよくさせられる方法なのに、
この相手はそれを知らない。



正義感が強くて、優しく、誠実で、妹や奥さんを大事にしている、男として赤点のお兄さん。それを——壊す。

楽しみで、楽しみで、笑いを堪えられない。キュウ、と。

膣肉を収縮させて、お兄さんのチンポに抱きつく。男の気持ちの良い場所に膣肉を絡めて、理性を融かしてゆく。

「なんだ、これっ……アイツと、全然、違うっ……」

誘導するまでもなく、妻の感触と比較する。当たり前だ。

こんな夫と、いたとしてあと数人程度の経験しかない穴が、男たちに耕された私の穴と比べものになるはずない。



「はあっ……愛里紗ちゃんっ！
射精るっ！」

愛里紗ちゃんの膣内に射精すよっ！」

「だめ、だめですっ♥
中はっ……そんなのっ……！」

回先だけの抵抗の言葉が、今のお兄さんに通じるわけがない。
だけど、そんな理性が残っているわけがない。
そんな自信を持って拒絶すると、
私を掴むお兄さんの手の力が増して――



「愛里紗ちゃんっ！ 愛里紗ちゃんっ！
ごめんっ！ でも、僕っ、ガマンできないうっ！」

直後、私が許可を出す前に、お兄さんは射精する。

どくっ、どくどくどくっ！

随分と溜まっていたのか、濃厚な精液が私の膣内を満たしていく。



音が、聞こえる。
ピシ、ピシと、壊れる音。

誠実な、普通の女性が理想に思う男性像たるお兄さんが壊れていく。
夫婦の寝室で、嫌がる娘に膣内射精する。

薬の効果が抜けて、正気に戻っても、この背徳の快感は忘れられない。
私の身体を味わう法悦から、
女の身体を使う至福から、
お兄さんはもう——逃れることなんて、できない。



私がお兄さんと関係を持ちはじめってから、二ヶ月。
お兄さんは完全に私の身体の虜だった。

最初こそ、レイプ同然の自分の行為を後悔していたけど、
罪悪感を利用すれば、籠絡は簡単だった。

何度か抱かせて、そのたびに色んな快感を教えてあげた。
そのたびにお兄さんは私に依存してきて、
今では毎日、メッセーシアプリで私の機嫌をとってくる。



「愛里紗様あ……」

捨てられかけた愛玩犬のような表情で、
お兄さんは私の割れ目に肉デイルドチンポを擦りつけてくる。

私をご主人様の所有物マツメスであることも、

何のために私がお兄さんに近づいたのかも、

全部話して、本当の私を見せて。

それでもお兄さんは、それを誰にも話さなかった。



挿入の許可をねだってくる駄犬に、
焦らすよう腰を揺すって割れ目で撫で返す。

「この間メッセージしたアレ、
考えてくれましたか？」

「そ、それは……」

お兄さんの視線が罪悪感を帯びて逸らされる。
ただどその視線は私のおっぱいからは離れていない。



「まだそんな躊躇してるんですか？」

奥さんに黙って、毎日おねだりしてくるのに？」

「だって、それは……」

「あのときの動画があるから、ですか？」

ふふっ ♥

最初はそうだったかもしれないけど、

今は違いますよね？」



「あんな動画なくっても、お兄さんは協力してくれますよね？」

「だって、お兄さんは家族なんかより、

別の男に調教され尽くしたマゾメスに

射精することの方が大事なんですもん♥」

ビキビキと、押し当てられた肉デインルドチポが張りを増していく。

「このおっぱいも……」

おまんこも……

もうナシじゃいられないですよね？」



こくん、こくんと頷くお兄さんの情けなさに、
私も我慢が限界だった。

「いいですよ。」

挿入れさせてあげます。

奥さんにはごめんなさいしましょうね」

「あ、ああ……」

ありがとうございませう愛里紗様あつ♡

ごめん、ごめんっ……

もう、無理なんだっ……愛里紗様から、離れられないんだっ……!」



「んっ♡」

今日も浮気セックスガマンできませんでしたね♡
いいですよ。腰振って♡」

「ありがとうございますぅっ」

二月前まで良き夫で、良き兄で、
良き父でもあった駄犬は、
私の言葉ひとつで嬉しそうに腰を振り始める。



「んっ♡ あんっ♡ はあっ♡」

たっぷりと仕込んだ甲斐あって、
お兄さんの腰使いはだいぶさまになっていた。

——穴のことなんて気遣っちゃダメ。
オナホ

——自分が一番気持ちよくなるように壊しなさい。

——教えたとおりの乱暴な突き込みが、
マゾメスの私には一番よく。

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

「んっ♡

もう一回っ♡

聞きますねっ♡

メッセしたアレ、

考えてくれましたたあんっ♡」

お兄さんは目を逸らして、

だけど腰の動きは加速させて、

「やり、ます……」

ア
チ
ッ

ア
チ
ッ



「なんですか？

小さくて聞こえませんでした」

「やりまっすっ……やりまっすからっ！」

大の大人が、

今にも泣き出しそうな表情で、

腰をへこへこさせながらおねだりしてくる。

「その言い方だと、私がお兄さんを脅してるみたいじゃないですか。

違いますよね？

お兄さんは、この——」



「私の身体が味わいたいんでしょう？
娘さんを作ったこの寝室で、
妹の親友に浮気生膣内射精したいんですよ？」

お兄さんの顔に浮かぶのは罪悪感。
だけど表面上のものでしかない。
その証明に、私の教育で随分と慣れてきた腰の動きは、
はじめてのときよりずっと激しく私のおまんこを責め立ててるし、
なにより立派な肉デイルドは、言われて膨らみをさらに増した。



「いいんですよ、別に。」

動画はありますが、お兄さんが本当に嫌だっけ言うなら
動画は消しますし、もう二度と会ったりしません。
前みたいに奥さんと、娘さんとお幸せに♥」

その言葉に、お兄さんの顔面は蒼白に染まった。

この男はもう、私から離れられない。^{オス}

私の媚肉を味わうためなら、どんなことだってするだろう。

大事な大事な、家族を対価に差し出してでも。

いやむしろ、そんな背徳でこそ興奮を覚えるように仕上げた。



息を吸うのも忘れたのか、一瞬声を詰めてから、

「愛里紗様と、そのご主人様のために、
なんでもしますっ！
させてくださいっ！」

腰を振りながら、口にするまでもなく射精の許可をねだりつつ、

妻子持ちの優しいお兄さんは最低の誓いを口にする。

これで——できあがり♥

おまんこを餌になんだってする、都合の良い牡犬。



自分はマゾメスだったはずだけど、
私^{マゾメス}を理解^{わか}らせられない弱いオスを支配するのは——気持ちいい。

自分が屈服して、隷属すること、
ご主人様にこの悦びを与えられていると思うと、
それだけで子宮が熱くなる。

この犬になにをさせようか。

悪事とは無縁の人生を送ってきたであろう、正義漢に。

ご主人様に仕込まれて、染められた邪悪なアイディアがいくつも浮かぶ。

だけど最初は——



「なんでもするっていうなら、
具体的に言ってください。

お兄さんは何を……なんの手伝いをしたいんですか？」

その行為を想像したのか、突き上げる肉棒が勢いを増して、
ぐくり、と。

お兄さんの喉が、重い唾を飲み込んだのが見えて。
罪悪感と期待の入り混じった、情けない顔で。

グ
チ
ッ

ズ
ッ

ズ
チ
ッ

グ
チ
ユ
ッ

「妹をっ……空のことをっ……
愛里紗様のご主人様が……
レイプするの、手伝わせてくださいっ!」

喉の奥から搾り出すような、懇願。



「くすくすっ♡
悪いお兄さんですね……♡
でも、合格です♡
いいですよ。
お手伝い。のときのこと想像しながら、
妹の親友に浮気ザーメン注いでください♡」



「あ、あぁっ♡

あぁあっ♡

ありがとうございますっ♡

愛里紗様っ♡ 愛里紗様あっ♡」

どくどくっ、どぶどぶうっ。

嫌がる妹を羽交い締めにして、

股を開かせる背徳を想像しているのか。

いつもよりも勢いよく、お兄さんの浮気ザーメンが流れ込んでくる。



優しい顔立ちは、
妹の親友への膣内射精ナカダシの快感で蕩けていて、
どうしようもないくらい情けなくって。
それがどこか、空さんにも似ていて。

「ふふっ……♡
待たせてしまつてごめんなさい……♡
もうすぐですよ。空さん……♡」

溢れるくらい注がれた牝犬ベッコのザーメンを掬い取って、舐める。
正義感が強くて、気丈な彼女が堕ちていく様子を想像して。
子宮に広がる期待感に、私は絶頂を迎えた。

